

国際連携海外有識者招聘プログラム実施報告

2019年3月19日

文学部専任教授 合田正人

今回、2018年度10月1日から10月31日まで標記プログラムで明治大学に招聘したのは、現代フランスを代表するユダヤ系哲学者にしてストラスブール大学名誉教授のジェラルド・ベンスーサン先生(Gérard Bensussan, 1948-)である。ベンスーサン先生は1945年に、当時フランスの植民地であったアルジェリアのマスカラに生まれ、アルジェリア戦争時に当地で幼年時代を過ごし、戦争終結と共にフランスに移住、その後パリ第十大学(ナンテール校)で哲学を学ぶことになる。入学したのは1966年、「5月革命」と呼ばれる1968年の学生運動の指導者となり、その後東ベルリンに亡命するという極めて劇的な人生を送られた。まさに20世紀史の生きた証人のひとりである。当初マルクス主義の思想家・活動家であったベンスーサン先生はやがて、社会主義者にして近代シオニズムの父でもあったモーゼス・ヘスの研究を経て、ヘブライ語、ユダヤ教の学習を積み、フランツ・ローゼンツヴァイク、エマニュエル・レヴィナスといった現代ユダヤ哲学の旗手たちの研究に向かうことになった。著作は『マルクス批評辞典』を初めとして多数にのぼるが、今回は先生の主著のひとつ『メシア的時間』邦訳の出版とほぼ同時の来日となった。因みに初来日は、やはり合田が主催したレヴィナス『全体性と無限』出版50年記念シンポジウム(於明治大学、2012年)であった。

明治大学大学院文学研究科には他にもないレヴィナスを研究する後期博士課程の院生が複数在籍しており、そのことを考慮して、ベンスーサン先生には、10月3日、17日、24日の3回いずれも2時限の授業時間を使ってレヴィナスをめぐるセミナーを行って頂いた。添付したのはその際の記録である。明治大学大学院の院生のみならず、他大学の大学院生、更には他大学の教員も参加し、毎回、極めて刺激的で斬新なレヴィナス読解が展開された。質疑応答では、院生たちの質問に丁寧に対応してくださり、参加者たちは大きな教えを得たと確信される。

加えて10月10日には、ポール・オディ、フランソワ＝ダヴィッド・セバー、ラファエル・ザグリ＝オルリの三名を迎え、シンポジウム『倫理と政治——ジェラルド・ベンスーサンをめぐる』を開催した。このシンポジウムのために来日したこれら3氏は今フランスで最も活躍している哲学研究者であり、それぞれがベンスーサン先生についての論考を発表したのち、聴講者も交えて極めて活発な討論が繰り広げられた。1ヵ月にわたる先生の活動は実に精力的なもので、以上4回の講義、討論に加えて、10月20日には、同志社大学(今出川キャンパス)でメシア的時間をめぐる講演、27日には、京都ユダヤ思想学会主催のシンポジウム(慶應義塾大学日吉キャンパス)でシェリングをめぐる講演を行った。

招聘者である合田はもとより、明治大学大学院に在籍する院生たち、明治大学文学部哲学専攻の教員たち、更には他大学の学生、院生、教員、一般聴衆の方々、いずれにとっても、非常に質の高い知的経験の機会を与えてくださったベンスーサン先生、この招聘を可能にくださった明治大学の関係者諸氏に心より御礼を申し上げる次第である。